様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１３８０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２００３

研究課題名（和文）明治期「日本哲学」の可能性をめぐる研究

研究課題名（英文）Study on potentialities of Japanese Philosophy in Meiji period

研究代表者
森下　直貴（Morishita, Naoki）

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：７０２００４０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期「日本哲学」を政治的イデオロギーとしてではなく、哲学思想の次元において内在的に捉え直すことをめざした。研究の焦点は日本哲学の第二世代を代表する井上哲次郎の哲学におかれた。明治哲学界のコンテクストをふまえて、井上の「現象即実在論」の主柱が＜同情＞の形而上学であることを浮かび上がらせた。この＜同情＞の核心には、各個々人を分子的結節点とする「縦横無限の連関」としての「共同性」に対する「平等無差別」の感情がある。以上の研究を通じて、「世界哲学」としての明治期の日本哲学の特質を把握するとともに、それが大正期以降に一国主義的な「日本精神」へと変貌していった内在的理由をも解明することができた。

研究成果の概要（英文）：In this study the structure of “Japanese philosophy” of Tetsujiro Inoue is philologically analyzed and considered. Through illuminating conflicts among views of philosophy in Meiji middle period, and comparing his view with Hajime Ohnishi’s view concerning philosophy and consciousness, it emerges that the core of Inoue’s philosophy is the unique idea of “Sympathy.” This idea means the cosmological activity toward so compassionate unification that it is here expressed as “Uni-pathy.” In conclusion, Inoue’s metaphysics of “Uni-pathy” had been not only the paradigm of “Japanese philosophy” in the modern intellectual history, but also it remains the same today.

研究分野：倫理学

キーワード：井上哲次郎　西周　形而上学　同情　スペンサー　大西祝　日本精神　戦後思想

１．研究開始当初の背景

日本哲学すなわち日本語を用いた哲学は明治期に始まる。しかし、近代日本哲学史の「通説」では、日本哲学は大正期の西田哲学に始まるとされ、明治期の日本哲学は事実上無視されている。

この通説を作り上げたのは哲学の京都学派である。戦前の政治に深く関与した京都学派は、戦後を生き延びるための自己防衛として、西田の師であり、明治哲学の代表者にして戦前国家体制のイデオローグであった井上哲次郎から、西田哲学を切り離す必要に迫られた。そのために、井上哲学は「折衷」として貶下され、それと対比して西田の哲学が日本文化の伝統をふまえた独創として持ち上げられた。こうした結果、明治哲学とその後の展開とは切断され、明治哲学を無視した「近代日本哲学史」が戦後の「通説」となって今日にいたっている。

他方、明治哲学そのものに注目した研究では、「戦後思想」のバイアスに引きずられていた。戦後思想の主流は、戦前の国家主義と戦争を否定し、戦後の民主主義と平和を肯定する。この白黒二元的な観点から、反国家・反戦争につながる思想家には高い評価が与えられ、その系譜（福沢や大西祝）が際立たされる一方で、戦前の「教育勅語」と「国民道徳」を主導した井上哲次郎らには過度に低い評価が投げつけられてきた。その結果、明治哲学が当代の西洋哲学と問題意識を共有していた側面は理解されなかった。こうして明治哲学は政治イデオロギーによって否定され、忘却されたままになっている。

要するに、明治期の日本哲学をめぐっては従来、政治的対抗軸からしか見られてこなかったため、無視と忘却の中で、その哲学思想が内在的に研究されてこなかった。また、たとえその種の対抗軸から離れていた場合でも、仏教思想に引きつけた解釈に止まっていた。

２．研究の目的

本研究は、以上のような「通説」と「戦後思想のまなざし」を括弧に入れつつ、明治期「日本哲学」の全容を哲学思想の次元において内在的に捉え直すことをめざした。

ここで「哲学」について説明を加える。思想を含めて伝統のある文化は、外部からの影響を受けつつも、それを自己の内部で変換し、解釈を加える中で自己変容する。明治期の「西洋芸術」の受け止め方には三つの水準があった。すなわち、成果の断片を輸入する「パーツ」、理論から方法までを丸ごと移植する「パッケージ」、理論や考え方の根本・前提に遡る「パラダイム」の三水準である。そのうち「パラダイム」の水準で「西洋芸術」を受けとめたとき、「哲学」の名に値する思想が誕生する。その意味において、西周こそは明治期日本哲学の第一世代の哲学者と称されるに値する。

さて、本研究の焦点は、第一世代の西周に続く第二世代の井上哲次郎の哲学におかれ、とくに彼の「形而上学」思想（現象即実在論）に注目された。具体的には、江戸期の思想伝統と西洋哲学（とくにスペンサーとショーペンハウアーの思想）との交錯の中で、井上の哲学観や、宗教観、倫理学の試み、国民道徳論の内容を（当時の哲学者、とりわけ大西祝のそれと比較しながら）解明し、それを通じて彼の形而上学思想の生成と展開を跡づけた。

また、明治哲学をより広く捉えるために、井上を結節点にして、加藤弘之の進化思想や、中村正直や西村茂樹の修養論、江戸期の心学以来の宗教と哲学の概念布置の変容、岡倉天心の美術思想、横井時敬や柳田國男の農政思想を配置することで、研究に奥行きと広がりをもたせた。

以上の研究を通じて、「世界哲学」としての日本哲学の特質を浮き上がらせるとともに、それが大正期以降に一国主義的な「日本精神」へと変貌した内在的理由を掘り下げて解明することができた。この基礎工事の上ではじめて、近代日本哲学史を書き換えるだけでなく、延いては将来、日本哲学（日本語による哲学）を創造的に構築することも可能になると考えられる。

３．研究の方法

本研究を進めるための方法は次の 3 点の視点（枠組み）にまとめられる。第 1 は自己変容の視点である。明治期の日本哲学の場合、江戸期の伝統を土台にして西洋哲学を受け入れる中で、独自の解釈を通じて自己変容を行った。それが第二世代の場合、東洋哲学史を繰り込んだ上での世界観（形而上学）レベルの東西哲学の総合である。

第 2 は、当時の世界哲学である西洋哲学との同期性という視点である。西周とコントや J.S.ミルとの間にはパラダイムの水準での同期性がある。井上とスペンサーやショーペンハウアーの間でも、また第三世代の西田とジェイムズやベルクソンの間でも同様である。明治期の日本哲学は日本語が用いられた「世界哲学」である。従来の研究では、19 世紀後半から 20 世紀初めの西洋哲学との比較が十分ではなかったため、その点が見落とされていた。

第 3 は、論争のコンテクストへの臨場の視点である。当時の哲学者たちの論争のコンテクストに降り立ち、彼らの個性の違いと共通性を感じるために、当時の『哲学会雑誌』をつぶさに検討した。このようなメゾの視点（時代的背景のマクロの視点と個別テキストのミクロの視点の中間）は思想史を捉える方法論として有効である。この視点から、明治の哲学者と同じ平面に立って彼らの思想展開をエピジェネティクに追

走した。

４．研究成果

以下は井上の形而上学思想に限定して 6 点にまとめたものである。井上以外の加藤や西村等の研究成果については、本研究会が主催した日中国際シンポジウムの場で発表され、反響を呼んだ。この国際シンポジウムも成果の一つであり、今後も継続される予定であることを付言しておく。

（1）日本哲学第一世代である西周の「性理学」は、伝統的東洋思想の根幹（とくに徂徠学）をふまえつつ、心理・社会科学の体系の基礎づけを意図した人間本性論ある。それは当時の日本の思想界にとっては革命的であっただけではなく、さらにコントを超えて当時の欧米の水準を凌駕する契機をすら含んでいた。しかし、「性理学」の試みは晩年には放棄され、西周の「淵源」への志は井上に受け継がれた。

（2）『哲学会雑誌』には、明治初期の哲学者たちが哲学観をめぐって衝突する様子が映し出されている。最後のステージ（明治 23 年以降）では、大西の批評哲学の立場、元良勇次郎の実験心理学に基づく科学思想（経験重視と帰納法）の立場、世界観としての東西哲学の総合という志向をもち、東洋哲学史を確立すべく最新の方法論を持ち帰った井上哲次郎の立場が衝突している。

（3）井上の『倫理新説』と大西の『良心起原論』を比較すれば、「理想」や「良心」の捉え方の大枠は両者に共通している。つまり、両者の背景には儒教的化醇論がある。井上はその上にスペンサーを取り入れ、大西はカント哲学を全面的に受け入れる。両者ともに加藤弘之に対して目的論的である。とはいえ、両者の間には重大な相違点が少なくとも 2 点ある。１点目は理想と現実との関係である。井上の場合が「現実の中の理想」であるのに対して、大西では理想が現実を批判して現実になり、これがまた新たな理想と対立して乗り越えられるかぎり、「現実に対抗する理想」である。２点目は個人と社会の関係である。井上の理想は社会から個人の内面へと収斂する。井上では一面的に個人は社会の部分だからである。それに対して大西の理想は、個人の意識と社会との往復運動の中で生成する。社会との関係が交互的だから、個人から社会的関係への方向づけが生じる。ここでの相違は日本哲学にとって重要な意味をもつ。

（4）井上の課題は形而上学（日本哲学）の研究・確立と国民道徳の方向づけ・育成の二つであった。この両者の絡み合いの展開から成立したのが、「現象即実在論」を実践化した「心即大我」論である。ここで「利己」や「個人」は「利他心」としての「共同性」に解消される。「共同性」への傾斜は伝統思想に由来するが、コントや J.S.ミルやスペンサーとの格闘をくぐり抜けたかぎり、伝統の革新でもあった。「共同性」の核心にあるのは独特の＜同情＞である。これはコスモロジカル（メタフィジカル）な融合化の感情であり、宇宙全体と心と社会を貫いて「自他の融合」または「平等無差別」をめざす活動である。この＜同情＞こそが、現象と実在をつなぐ「即」の内実であり、井上の「日本哲学」の本体である。井上の日本哲学は、「実在＝大我」と「心＝個我」と「タテヨコの共同性」を＜同情＞が充満しつつ貫くところに成立する。

（5）世界哲学としての意気込みをみせた「日本哲学」は、大正期以降、日本本位の精神活動を誇示する「日本精神」へと変容した。この変容を促した要因には種々あるが、思想内在的にいえば「神即理想的な人」という神道の捉え方が決定的に重要である。そしてこの前提にあるのが＜同情＞の形而上学である。「日本哲学」と「日本精神」とを隔てているのは、その種の具象化の徹底のわずかな差ということになる。

（6）結局、井上哲次郎の「日本哲学」の主柱は＜同=情＞の形而上学である。この＜同=情＞は、個々人を分子的結節点とする「縦横無限の連関」としての「共同性」に対して、その本能的な基盤となると同時に自覚的な動機ともなるような「平等無差別」もしくは「自他の融合」の感情である。

（7）「共同性」の「感情」的一体化という思想は、なにも井上だけの特異で奇怪なものではない。それはむしろ近代「日本哲学」のパラダイムであったといえる。例えば、「日本哲学」の第三世代である西田幾多郎の哲学では、初期の「純粋直観」から後期の「行為的直観」までにいたる実在観のうちに内在主義的に引き継がれた。他方、井上を毛嫌いした大正世代の和辻哲郎の倫理学では、その「間柄」の基盤である「風土的身体的感受性」の観念のうちにいっそう身体化されて受け継がれている。「共同性」に過度に傾斜し「感情」的一体性を強調するスタイルは、少なくとも近代日本思想の主流の特徴であった。しかも、それは今日、「関係主義」や「共感主義」という薄まった形で蔓延している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 14 件）

①森下直貴：井上哲次郎の＜同＝情＞の形而上学―近代「日本哲学」のパラダイム、『浜松医科大学紀要一般教育』第 29 号、1-43 頁、査読有、2015 年 3 月

②森下直貴：近代日本倫理学の＜共同性へのまなざし＞―特殊性ではなく、《普遍的個性》へ（主題別討議報告「近代日本倫理学の総括ないし反省」堤題 1）、『倫理学年報』第 63 集、52-55 頁、査読有、2014 年 3 月

③加藤恒男：中村正直と修養の始め―『西国立志編　原名自助論』の意義、『哲学と現代』第 30 号、162-198 頁、2015 年 2 月

④津田雅夫：「思想」と「哲学」の＜間＞―『日本倫理思想史』（和辻哲郎）への一視角、『河北民族師範学院学報』特集号、査読有、印刷中（2015 年 6 月刊行予定）
⑤津田雅夫：井上哲次郎の現象即実在論について―明治期日本の思想空間、『中部哲学会会報』第 46 号、査読有、印刷中（2015 年 6 月刊行予定）
⑥津田雅夫：唯物論とモラル――一つの戸坂潤像、『季論』第 21 号、116-127 頁、査読無、2013 月 7 月
⑦津田雅夫：文化的雑種について―日本における文化的創造性に関する試論、『岐阜大学地域科学部研究報告』第 31 号、13-24 頁、査読有、2012 月 9 月
⑧津田雅夫：「情的把握」について、『中部哲学会年報』第 43 号、1-11 頁、査読有、2012 年 7 月
⑨津田雅夫：戦後の和辻哲郎（二）―『歌舞伎と操り浄瑠璃―』、『岐阜大学地域科学部研究報告』第 30 号、1-14 頁、査読有、2012 月 2 月
⑩別所良美：近代日本形成期における進化論の意義、『哲学と現代』第 30 号、150-161 頁、査読有、2015 年 2 月
⑪別所良美：民主主義の基盤としてのベーシック・インカム、『哲学と現代』第 29 号、65-76 頁、査読有、2014 年 3 月
⑫三谷竜彦：ポストモダン的な人間関係のあり方についての批判的考察、『哲学と現代』第 29 号、86-99 頁、査読有、2014 年 2 月
⑬三谷竜彦：裏切られた民藝運動―柳宗悦の「美の浄土」論についての批判的検討、『哲学と現代』第 28 号、132-155 頁、査読有、2013 年 2 月
⑭李彩華：明治・大正前期における柳田国男と横井時敬の農政思想―農本思想の近代化への対応の視点から、『哲学と現代』第 28 号、98-120 頁、査読有、2013 年 2 月

〔学会発表〕（計 11 件）
①森下直貴：西周の性理学、日本思想史研究会、名市大、2014 年 5 月 11 日
②森下直貴：明治期「日本哲学」の基本構造―西周・井上哲次郎・西田幾多郎、日中国際シンポジウム「近代日本・中国における哲学思想の再検討」、北京外国語大学日本研究センター、2014 年 9 月 13 日
③加藤恒男：「国民道徳」について―修養の始めと勅語の成立、日中国際シンポジウム、北京外国語大学日本研究センター、2014 年 9 月 13 日
④加藤恒男：修養の現在と教養の意味、大学教育学会第 36 回大会（自由研究発表）、名古屋大学、2014 年 6 月 1 日
⑤津田雅夫：明治期日本の思想空間―現象即実在論・再考、平成 26 年度中部哲学会大会、2014 年 9 月
⑥津田雅夫：明治期日本の＜宗教と哲学＞、日中国際シンポジウム、北京外国語大学日本研究センター、2014 年 9 月 13 日
⑦別所良美：近代日本形成期における進化論の意義、日中国際シンポジウム、北京外国語大学日本研究センター、2014 年 9 月 13 日
⑧三谷竜彦：岡倉天心の『東洋の理想』とは何か、日中国際シンポジウム、北京外国語大学日本研究センター、2014 年 9 月 13 日
⑨宮島光志：カントと桑木厳翼―〈性格〉を哲学する、平成 26 年度「西田幾多郎哲学講座」、かほく市、2014 年 11 月 29 日
⑩宮島光志：『哲学大辞典』と明治期アカデミズム―井上哲次郎から桑木厳翼へ、日中国際シンポジウム、北京外国語大学日本研究センター、2014 年 9 月 13 日
⑪李彩華：柳田國男の農政思想と常民―梁漱溟の「理性自治」の思想に関連して、日中国際シンポジウム、北京外国語大学日本研究センター、2014 年 9 月 13 日

〔図書〕（計 3 件）
①津田雅夫：『増補 和辻哲郎研究―解釈学・国民道徳・社会主義』青木書店、2014 年 1 月、総 300 頁
②マルティン・ゼール著『自然美学』（加藤泰史・平山啓二監訳、法政大学出版会、2013 年 12 月、435 頁）、宮島光志訳：第一章（観照の空間としての自然）、37-96 頁
③朱坤容・王青等編『日本哲学与思想研究文集―卞崇道先生記念号輯』（中国社会科学出版社、2015 年 2 月）所収、李彩華：明治・大正前期柳田国男的農政思想、211-226 頁（中国語）

６．研究組織

(1)研究代表者
森下直貴（Noaki MORISHITA）
浜松医科大学医学部教授
研究者番号：70200409

(2)研究分担者
別所良美（Yoshimi Bessyo）
名古屋市立大学人文社会系研究科教授
研究者番号： 10219149

李彩華（Saika Lee）
名古屋経済大学経営学部教授
研究者番号：10310583

(3)連携研究者
津田雅夫（Masao TSUDA）
岐阜大学地域科学部名誉教授
研究者番号：10144099

宮島光志（Mitsushi MIYAJIMA）
富山大学大学院医学薬学（薬学）研究部教授
研究者番号：90229857

なお、研究協力者として加藤恒男と三谷竜彦に参加してもらった。